

▼『東方』310号より

一 発掘と再建——いまに生きる清官・包公の意味するもの

▲ 納村 公子

『東方』三二〇号より

発掘と再建

——いまに生きる清官・包公の意味するもの

納村公子(日中院講師・翻訳家)

本書は、陳桂棣、春桃夫妻が『中国農民調査』の次に上梓した異色のルポルタージュである。中国の「三農」問題を赤裸々にルポした前作は、国内外の注目を浴びた。最近アメリカで英語版が出版され、海外メディアからの取材申し込みはいまも続いている。中国国内では発禁後、無数の海賊版が出され、著者夫妻の名をかたった「三農」ものの本も続々つくられた。こうした偽本を著者の次作と思った人も少なくないが、『中国農民調査』の次は本書以外にはない。この夏、合肥の著者夫妻を訪ねたので、本の紹介とともに町のように紹介したい。

本書は包公の生誕の地、安徽省合肥を舞台とし、包公墓とされるいくつかの墓の発掘と、史跡としての包公墓の再建をめぐるルポである。包公といえば、一〇世紀初め、北宋時代、開封で知府を勤めた包拯。役人の不正を直言してはばからなかったことから、明代に、庶民の味方の清官として物語化され、日本に伝えられて大岡越前話などがつくられる基となった。中国で包公の物語は庶民に広く愛され、いまでも名判官として知らない人はいない。著者は『中国農民調査』を手がける前の一九九九年、包拯生誕千年の記念の年から取材を始めたという。そのあと「三農」というテーマが生まれ、包公墓のルポは一時棚上げしておいたもので、「三農」をテーマにした次作を完成させる前に発表したとのこと。

トップページにもどる

陳桂棣・春桃著

『包公遺骨記』

人民文学出版社・二〇〇五年・一、〇六〇円



『中国農民調査』がそうであったように、本書も実在する登場人物はすべて実名。前作では後半部で農業問題の専門家、何開蔭氏が主人公になっていたが、本書でも合肥市文化局の「文物工作者」程如峰氏が主人公となっている。時代は文化大革命中の一九七三年から、包公墓が再建される一九八七年、調査の真に迫って描かれている。

一九七三年、合肥市の通達が新聞紙上に発表された。市近郊の大興集で包公墓を含む広大な土地を「合肥二鋼廠」の石灰窯建設のために徴用するというものだった。この通達を知った考古学者の呉興漢氏が待ったをかけ、省政府から予算を引き出して、発掘調査チームを結成する。チームは省の博物館、市文化局、現地の大興公社、そして包公の子孫の代表者からなる「混成部隊」で、ほとんどしろうと集団に近い。文化局の一員として参加した程如峰氏も解放軍出身で、文化局では宣伝や編集などの仕事をしてきた。しかしこの調査に後半生をかけた程氏は包公研究の専門家

▼『東方』310号より

二 発掘と再建——いまに生きる清官・包公の意味するもの

▲ 納村 公子

になり、文革後に発表したレポート「解開包公墓の謎」（包公墓の謎を解く）は海外華僑社会の注目を集めることになる。

大興集の宋代墓は全部で七基あり、一〇七号の番号がつけられる。そのうち最初に着手した小さい一号墓から不完全な人骨と二枚の墓石が発見された。墓石は「包公墓銘」と「董氏墓誌銘」、すなわち包公夫妻のものと判明。これまで包家が包公墓として祭事を行ってきた主墓には何もないことがわかる。また董氏という正妻の名はこの墓石によって初めて明らかにされた。包公の家族では、早世した長男の嫁である崔氏が、包公の晩年に生まれた男児を引き取って養育し、包家を支えたということで歴史書に賢夫人として書かれたので、今日まで伝えられているのだが、正妻は



1987年に再建された包公墓（安徽省合肥市）。北宋代の様子を踏襲した建築で趣のある公園になっている。

[トップページにもどる](#)

不確かな記載しかなかったのだそうだ。

程氏は墓の謎を探るべく、包家の系図、「家譜」を探した。最初に期待をかけたのは、本家にあたる「恩生」（北宋皇帝から与えられた世襲の役職）の包家が所蔵していた家譜だった。しかしこの家譜は、包公の肖像画ともども紅衛兵に焼かれてしまったことがわかった。本家から紹介された分家では、全冊そろっておらず、何冊かは刻みタバコを巻くのに使ってしまったという。幸い他の分家から一四卷本（二九一八年刊）と二四卷本（一九〇四年刊）の『包氏宗譜』とを見つけることができた。二冊の『宗譜』を調べたところ、南宋年間に墓が破壊され再建したとあることから、一号墓は当時移設したものと推察するにいたる。一方、一号墓から発見された人骨は北京の中国科学院の鑑定で、五〇歳以上の男性の骨とされ、まさにこれが包公の遺骨だとされる。後半はこの遺骨の行方がテーマになる。鑑定に用いた部分は博物館に保管されるが、それ以外は、子孫の代表として調査チームに加わった包旭義氏の手で肥東県大包村にある包公の父の墓に埋葬することになった。が、当時は「四旧」を打ち砕く運動のさなか、目的地を目の前にして埋葬は阻止され、最終的に大包村の包先正氏の手によって秘密裏に埋葬される。

それから五年後の一九七九年、文革が終わり、清官は貪官より封建社会の悪だとされた包公の汚名はそがれ、合肥市中心部の包公祠を整備し、新たに包公墓を当時のままに再現する計画が決定、大包村の埋葬場所から遺骨を掘り出して移すことになった。発掘の日は大盛況なセレモニーまで行ったのに、掘り起こしてみるとその場所に遺骨はなく、漬け物を入れる瓶が出てきただけだった。この謎を知る包先正氏はこの世を去っている。秘密の埋葬のとき、包姓で

ない若者が一人手伝っていた。程氏はその人物に当時の状況を聞いた。若者は包先正氏が何をしていたのか全く知らないが、埋葬地点から瓶が掘り出されたとき、遺骨は先正氏が「拉回来」（取り戻した）のだと直感したと言う。そして先正の息子に会ってみると、目に一丁字もない父と違って息子は高等教育を受けた人で、最後の「恩生」包先海氏と養子縁組を結び、後継者とされた人だったことがわかる。だが、息子も遺骨の事実は全く知らなかった。ついに遺骨は行方不明となった。程氏は一族の人間関係を思い、もはや遺骨を求めることは不可能だと感じる。そして包公墓が再建されたとき、何もない空の棺が安置されたのであった。『中国農民調査』の原著は黄色一色の表紙だったが、この次作も明るい黄色でセンターのタイトルの上に赤い三日月がついている。イスラム教の三日月のようだと思っていたところ、これは京劇の包公の隈取り、額に描く曲線を表しているのだと教えられた。中国では歴史が人の心に生々しい形で生きている。たとえ二千年前の孔子であっても、「批林批孔」で人々に本気でたたかれるのだ。大興集の一号墓から発掘された人骨が本当に包拯のものなのか、疑いの余地はまだあるように思うのだが、本書に登場する人々、そして著者自身もそれを疑うことなく、調査と墓の再建に情熱を傾け、それを記録している。この調査と再建の事業は、実は現実の政治に対抗するものとしてしっかりと結びついているのである。文革中に遺跡が破壊されたり、祖先の祭事が禁止されたりしたというばかりでなく、文革後の墓再建も経済開発の波にもまれてきた。

「包公は庶民に愛されているが、役人にはそれほど愛されていない」と陳桂棣氏は言う。実は、市内には包公にまつわる史跡が一つ残っていた。包公が廬州太守として合肥

トップページにもどる

に帰ってきたとき、学府の学生のために掘ったと伝えられる井戸である。「包公井」の名で知られ、中国建国当時、井戸周辺には旧学府の建築物があったが、その後の都市改造のためにみな取り壊され、最後に残った遺跡だった。ところがこの井戸は一九八六年、中学校建設のために埋められてしまった。井戸の埋め立てには一般市民や有識者の反対があったが、それは通らなかった。現在、校内に「包公井」がつくられている。「易地重建」（場所を移して再建）したと政府は言うが、北京の天安門を上海に移して、天安門と言えるか」と、陳氏は腹立たしげに言っていた。

「為民請命、鉄面無私」の包公だからこそ、研究する甲斐があり、今日的な意味が生じるのではないか。

そして本書によつて描き出されたのは、血統によつて結ばれた宗族文化の深さだ。本書には包姓の人が次々登場する。何人かは写真が掲載されているが、みなどこことなく似ているように思える。「聾子」と呼ばれた無学の農民、遺骨を隠した包先正氏の隙のない表情を見ると、政治運動でも経済開発でも変えようのない宗族のプライドを感じる。

合肥市は中心を流れる淝河が北の淮河と通じ、東南の巢湖に流れて長江に合流。昔から水運の商業都市として栄えていた。淝河は西北から流れてきて二本に分かれ、再び合流して東南の巢湖へと流れている。町はこの川の輪の中に建設され、城壁と川で二重の守りを持った環濠都市だった。いま城壁はないが、水辺が木立に囲まれた公園地帯になっていて、江戸城の堀を連想させ、親しみを感じる。再建された包公墓「包孝肅公祠」（孝肅公は諡）はその公園地帯の一角にある。